

公開講座「江戸東京の火災被害の歴史」

この講座では、江戸東京において、大きな被害を出した火災について現地を歩きその被害の実態を把握するとともに、400年間の火災被害について規模の大きい火災（焼失面積500坪以上）からその変化や取られた対策の効果など説明しております。

7回目を数える今回は、来年災害発生から90年となる関東大震災の避難について取り上げました。関東大震災では、本所被服廠跡地において避難したおよそ4万人が地震発生数時間後で亡くなるという惨事になりました。当時は避難場所として指定されたところがあるわけではなく、人々は広い場所を求めて避難したと思われます。これら当時の避難について、本所区を中心に関東大震災直後に作成された延焼動態図を基に説明しました。

また、関東大震災の教訓から住民の生命の安全を確保するために東京において広域避難場所が設置された経緯を説明しました。

午後の街歩きでは、焼失範囲の北側になる東京スカイツリーの足元の本所吾妻橋から、現在親水公園となっている大横川をたどり、橋のたもとで773人の焼死者を出した横川橋に行きました。この横川橋から被服廠跡地に向かい本所区の出火件数と避難行動について実感するとともに、関東大震災の記録資料がある復興記念館を訪ねました。そこから回向院を通り両国橋を渡り、住民が自らの力で延焼をくいとめた神田和泉町佐久間町まで6kmを歩きました。これら大きな被害を出した場所と被害をくいとめた場所の違いを見ることで、参加者の方々が防災を考える一助となることを期待しております。

